

先輩に聞いてみました。

大学院での研究 インタビュー



所属：文学研究科 修士3回生
Tさん〔2021.11現在〕
就職先：私立の中高一貫校

—大学院での研究内容を教えてください。

現在、修士課程に3年所属しています。最初の2年間は文学作品を、現在は映画作品を扱っています。作品分析を主にしていて、気になったところ、ここはちょっと不思議だなと思ったところを突っついて、一つの作品を深く掘り下げるといった研究をしていました。

—文学作品の分析をしたいという気持ちは、学部生の時からあったのですか？

文章を舐めるように読んで読解することが好きで得意で、それ以外のことが選択肢として頭に浮かばず、気付けば今に至っていました。構造を見ていくことや、キーワードから読み解く行為が好きだと自覚したのは高校時代で、きっかけは受験指導をしてくださった先生との出会いです。文章を構造として捉えることの楽しさに気付かせてくれました。読む行為にも戦略や技術があるということを教わり、それまでの自分のエモーショナルな部分を枠にはめることを知ったことにより、それまで漫然と読んで、カオスだと思っていた世界の見通しがちょっと良くなったことに快感を覚えました。

—修士論文は(11月時点で)どのような進捗ですか？

まだ執筆途中です。7割ぐらいいは書けていますが、新しく枠づけと論理付けでもっと勉強しなきゃいけないところがあるなという状態です。

—今聞かせていただいた限りでは、順風満帆に来られているように思うんですけど。

・・・人より進みが遅いし、滞りまくる人生を送っています(笑)。

—就職することは早い時点で決めていたのですか？

私の場合は、修士1回生の時点で大学の外に出ようと思っていました。大学の外の価値観に触れたい、と思ったからです。当然のことですけど、学問や研究に興味がない人だっていますよね。大学に進学しない人もいる。そういう人達に対して「教養がない」と見下す言葉を聞いて傷ついたことがありました。確かに学術研究を行うことや研究者が大切にされていない苦しい現状もあります。自分とは違うものに拒絶反応が出てくることも仕方がないと思いますが、それを言葉に出してしまう暴力性のようなものに違和感を感じたんです。こういった経験が教育へと目を向けるきっかけになりました。

みなさんの多くが、いずれは経験する就職活動。今回は、修士3回生の先輩が、就職を決めるまでにどんなことをしたのか、どうしてそこに就職をしたと思ったのかを、おすすめの本とともに語っていただきました。みなさんの将来の一つの指針になること間違いなし！是非ご一読ください。

「(他人と自分が)違うことは当然だけれど、皆で生きていくためにはどうすればいいんだろう」「異質さをうまく受け入れてみんなで生きていくためにはどうすればいいんだろう」と考えたことを還元したい、未来を担う人たちと一緒に考えていきたい。それならば、(就職するなら)教育に関係するものが良からう、となり現在に至ります。大学の外には出たいけれど、研究で用いる頭の使いかたや考えかたを活かした仕事ができれば良いな、と思っていました。そこで、国語科ならば、教育に携わりつつ教材研究やそのアウトプットなどもできて、自分の持ち味を活かしつつ好奇心を満たしつつ働けると思ったんです。

—自分の進路について考え始めたときのことを教えてください。

学部4回生の時に就職活動をしたが、雰囲気は馴染めませんでした。無理に周りに合わせるのではなく、自分の進路を見つけようと。論文については(修士の)2年間では到底仕上がらないと早々に見切りをつけました。教職の単位をそれまで取ってきていなかったことも見切りをつけた理由です。学部の時も何単位かは一応取っていましたが、本格的に取り始めたのは修士1回生の春からです。自分のペースが非常にゆっくりしているので、焦らずに過ごしたいなと考えていて、相談した両親もすぐに理解を示してくれてとても助かりました。

—教員免許の単位について教えてください。

先生になりたいと考えている人は、学部の時から単位を取っていったほうが良いです。免許については、学部ごとに取れる免許が決まっています。文学部でしたら国語科・英語科・社会科になります。結構スケジュールが過密になりますが、4年間で取ることができます。単位は、教育実習も含め、教育学部科目、文学部科目合わせて59単位になり、それに加えて、一般教養が9単位必要です(2021年度現在)。これら普通免許の単位は大学院卒業要件の単位には換算されません。私の場合、単位は修士1回生から取り始めたため、研究が少しおろそかになってしまいました。

学部生の頃は教師を目指そうと考えていなくて、「先生になる」という気持ちは学部の4年間で醸成されました。所属していたサークルで人間関係(コミュニケーション)がうまくいかなかったことで、言葉について考えたり、自分の心がささくってしまった時、自他の違い、ひいては異質さへの拒絶と同質性への安住の間で葛藤して、悩む時期がありました。その時、叱咤激励してくれた人が教育学部出身で、その人と知り合ったことで「あれ？この人、文学部で知り合う人たちとなんだか雰囲気が違うぞ。そういえば他の教育学部の知り合いもこの人の雰囲気に近いな」と感じて。

集団の質というか、それぞれの居場所の環境によって人格に違いができるんだということを初めて肌で感じて、そのまま教育学部的な空気が気になるな、という流れになりました。文学部にいただけなら考えつかなかったような思考法が身につくかもしれないと思ったことがきっかけで、教育学関係のことを調べ始め、じゃあ教育学部の授業もちょっと取ってみよう、教員免許を取ってみようという備えがあった中で、本格的に教師を目指すようになりました。

—文学部から教育学部への転部は考えなかったのですか？

教育学系の研究をするに対してはいまいちしっくりこなかったので、転部は考えませんでした。やはり自分が研究して論文を書くのであったら、文学部で作品研究だと。教育ではなくあくまで自分のメインは作品の分析でしたから。

—心がささくれてしまったと言われていましたが、原因はなんだったんですか？

もともとメンタルと体が連動してどんどん悪化していくタイプなんです。大学受験時、出身高校が進学校だったこともあったからか、目的をもって受験勉強している学生が周囲に多くいた中で、自分は特にやりたいことがあるでもなく。停滞している今の自分を変えなきゃまずいと思いつつも、全体的に消極的な気持ちで受験勉強をしていました。

入試に合格して入学したことで、とりあえず「このままじゃだめだ」と思っていた状況から脱出はできたけれど、きっと自分は何者にもなれないだろうという気持ちは消えませんでした。やりたいことも特に見つからず、なんとなく学歴だけ得て、なんとなく生きていこうと思うと絶望しました。憂鬱な現状への嫌悪感と対照的に、漠然とした理想がどこかにあるような気がして、それを掴みたくて「こうあるべき」を自分にも他人にも押し付けるようになり、生活リズムも乱れ、学部生の間は随分荒んだ生活を送っていたと思います。

「押しつけ」の意識が自分の中である程度緩和した後も、やはりコミュニケーションへの苦手意識は強く残っていました。構造で物事を捉えるのが一番伝わるだろう、他人ともコミュニケーションが取りやすいだろうと思って構造にばかり走っていた時期もあるんですけど、実際の(一般社会での)コミュニケーションの中で、かっちりした構造って、書き言葉とかでない限り、作れないし現実的でないと思えてきて。その場で一瞬で伝わるというものでないし、むしろゆるやかな空気感の共有がないとコミュニケーションがうまくいかないっていうことを学部の4年間でかけて肌で感じて学びました。時間かかりすぎですね(笑)。

—絶望というのは、漠然と感じていたんですか？

はい。私の(大学の)クラスの人たちは結構、「学歴をもらって就活してさっさと出ていこう。その間はモラトリアムだ!」という雰囲気だったのですが、自分はそれに乗れませんでした。かといって研究へのイメージも貧困で、学者を目指している集団にも上手くついて行けず、孤立したような気持ちでいました。モラトリアムな状況も楽しめずかえって不安になってしまっ。かといって不安がっていることを見せたくないという自意識が働き、内心との乖離に苦しんだ時期もあります。

先ほど触れたように、4回生で就職活動をしてみた時も周り雰囲気と合わず。入学時から続く、自分の気持ちがモヤモヤしたままで、で社会に出るのはダメだと思いました。無理せずに落ち着いて大学で周りの人から学びつつ自分の将来を考えたくて、修士課程に進学しました。

この話の続きである、【進路選択インタビュー】も、吉田南総合図書館のHPに掲載しています。そちらもぜひご覧ください。



先輩に聞いてみました。

教職の就活ってどんなもの？

進路選択インタビュー



所属：文学研究科 修士3回生
Tさん[2021.11現在]
就職先：私立の中高一貫校

―教職を目指す人の就活はどんな感じなんですか？

私立と公立で就活の期間や実施形態が大きく違います。私立については、1月から3月にセミナー説明会をオンラインで受けていました。説明会では、各学校の校長先生や採用担当の方が、自分の学校のアピールポイントをプレゼンされます。他にも、面接でこういうところを見てますよ、といった助言など、実際に雇う側が喋るという感じです。簡単な質疑応答もできました。

―オンラインでの就活は大変ですか？

移動時間や交通費がなくなるのでそこは楽だと思います。履歴書などもインターネットでやり取りできるほうが格段に快適ですし。それでも最終面接などは実地で行うのが大半だと思います。

―現在、様々なものがオンラインに切り替わっていますが、例えば対面授業とオンライン授業で何か違いを感じたことはありますか？

「興奮」が相手に伝わるという違いが大きいです。「先生の講義って面白い!」と学生が目が輝くと、先生もそれを感じてやる気が出て、というような場が形成されるんですよね。それがまたお互いのモチベーションにつながる。オンラインだと同じ空間にいないのでそういう気持ちになることが難しい気がします。オンラインだから伝わらないだろうという諦めに似た思い込みも、もしかしたら邪魔しているのかもしれない。私は舞台系のサークルに所属していたため、対面ならではの場の雰囲気や視線の有効性は強く感じます。

―なるほど。教員の就活に話を戻すと、私立と公立では、どんな違いがあるんですか？

私立は不定期で公募が出るので、就職活動をする際は結構目配りが必要になってきます。それに対して、公立は説明会などはありません。公立の対策は、自治体ごとにかわるので、受験する自治体を早めに決めて、出版されている過去問を解いておきます。採用試験に向けた勉強としては、時事的なトピックであったり、学習指導要領だったりなどに目を通す必要があるので、半年以上は準備期間として見ておいた方がいいと思います。

あと、私は修士2回生のはじめから、(教職課程の授業後やKULASISで周知されていた)公立の教員試験対策のための学内準課外活動サークルに入っていました。自分が元々教員になろうとずっと考えていたわけではなかったのですが、その界隈の空気はどういう雰囲気なんだろう、と知りたい気持ちもありました。これに限らずKULASISは教員免許取得に必要な情報が流れるので、特に学期はじめの前後はこまめに見たほうがいいです。最近是这样い必須情報は教職課程をとっている学生にメールでお知らせしてくれるようになったとはいえ、やはり自分でもチェックしておきたいです。このほかに、非常勤講師や学校現場でのボランティアの募集も掲載されることがあります。

―セミナー説明会はどれくらい受けられたんですか？

月に1回あるかないかぐらいでした。とりあえず応募してなるべく行くようにしてました。説明会は20分ぐらいの短いものでしたので。

みなさんの多くが、いずれは経験する就職活動。今回は、修士3回生の先輩が、就職を決めるまでにどんなことをしたのか、どうしてそこに就職をしたいと思ったのか、おすすめの本とともに語っていただきました。みなさんの将来の一つの指針になること間違いなし!是非ご一読ください。

―最初から希望先は決めていたんですか？

特に決めておらず、5月にオンラインで開催された合同説明会でザーッと見て選んでいきました。

―いろんな学校を見ていく中でどこに行きたいかが決まったという感じですか？

そうですね。あと、公立の試験勉強で教育トピックについて調べている中で、今の教育に携わる人の問題意識を知ったりカリキュラムの工夫やICT活用の実践事例を目にしたりする機会もあり、その中でこういう実践をしているところがいい、こういう校風が良いというものが定まってきました。

―教育トピックはどうやって知るんですか？

受験対策では文科省が公開している中教審の答申を読んでいくと良いです。その中に出てきた単語でわからないものを調べていくとトピックがどんどん繋がって行って、今の話題を知ることが出来ます。あとはTwitter等のSNSで教育関係の方が喋っていることを見ているのも良いと思います。ただ、もちろんSNSの情報は玉石混交です。見るのに慣れてくると「この人の言うことは参考になりそうだ」といった見立てが身についてくると思います。他にも[*教育系の情報サイト](#)で「先生の学校」というサイトも面白いです。公立校の試験対策で知ったトピックに、その学校がちゃんと意識的に取り組んでいるかどうかということも説明会で見えてきます。

―一般的な就職活動では企業のウェブサイトを見ることが多いと思いますが、良い点ばかり言っているように見えます。それをフラットに見るコツってありますか？

サイトを見て選ぶというよりは、受けたと決まってからの面接対策にウェブサイトを使うと良いと思います。例えば、就職したい学校の進学率が気になるのであれば、ウェブサイトも参考になると思いますが、私の場合は、支援費(研修のための費用)を教員に出しますと謳っていても、実際にどれほど教員がそのサービスを使って活かしているのか、また職場の同僚の雰囲気はどんなのかが気になりました。こういったことはやはり説明会じゃないとわからないことですな。

―やっぱり説明会に行くっていうのは大事ですね。

すごく大事です。

―勤務先を選ばれたポイントは？

説明会でのプレゼンテーションがきちんとしていたことです。進学率などを気にするのではなく、その校長先生が「世界は救えると信じている。誰かを救えるヒーローになってほしいと思ってます」と自分の言葉で表現していて、それがただ単にキャッチーだけでなく、どのように教育をしていけばそんな子どもを育てることができるか、計画が示されていたんですね。例えば進路指導でも、その子どもの未来を子ども自身にどう考えてもらうか、という時に、こういう考え方を教えます、というように。「理念」と「計画」と「思い」がちゃんと伝わってくるプレゼンテーションで、それを見て「ここがいい!」と思いました。教育というものは理想論に傾きがちな分野でもあると思うんですが、それがちゃんと理論をもった実践論として語られていたというのも大きかったです。学生がレポートを書く時の書きかたや考えかたのような、構造化された技術が活用されていて、教員側の学びや日々の研究が伝わってくるようなプレゼンテーションでした。

―根性論だけでなく、方法論があったから、理念に共感したということですね。

その通りです。雇う側のやる気というのは、一般的な就活でも感じることもあると思うのですが、それが本当にやりたいことがあって、僕たちにはこういう目標があるんだって思ってる人たちの空気ってやっぱり違うと思うんですよ。そういう意識を感じられたっていうのがありました。

―説明会は全部オンラインで？

はい。合同説明会が2日間開催されてた時は、その中にある動画だけで10個ぐらい見たと思います。実際にお話をしたのは3校です。

―修論を書きながらだと大変だと思うのですが。

実際問題として私が今なんとか間に合っているのは、今年の3月に現在所属している研究室から紀要が出るということで、そこに論文を投稿したからです。その論文が修士論文の半分に当たります。

―就職活動のスケジュールを教えてください。

就活のスタートが1月-3月、5月に説明会があり、5月末から6月にかけて教育実習が入ります。その後、すぐに私立高校の試験がありました。早いところだと教育実習が終わった3日後にありました。時期はその学校によりけりです。公立学校の場合は、試験期間が6月末から9月ぐらいと定まっていますが、自治体によってバラバラです。ちなみに非常勤講師の募集は通年、単発的に出ています。

―何校ぐらい受験されたんですか？

結果的に私立は2校で、公立も1次試験を受けました。1次試験の結果が届くか届かないかぐらいで、第一希望だった私立の合格通知が来たのでそちらに決めました。最終的に7月中に決まりました。

―具体的に、試験はどんなものだったんですか？

私立学校は筆記を課すところと課さないところがあって、第一志望の学校の試験は模擬授業と面接でした。7月に最終面接があり、模擬授業は20分くらいでした。50分程の授業を構想して、その一部をやるというタイプです。模擬授業はオンラインで、参加者は受験者2名と、審査官である校長先生と採用担当の先生でした。あとは、上層部の人がカメラオフでいらっやして、少し緊張しました(笑)。受験者もお互いの授業に生徒役で入りました。模擬授業後、休憩をはさんで、自分がおこなった授業のポイントを聞かれる面接がセットでありました。合格してとても嬉しかったです。

―大学院生活との兼ね合いは大変ではなかったですか？

はい、割り切ってやっていました。私はゼミが始まる前期のオリエンテーションで、「前期は就活で忙しくなるので休みがちになると思うので発表はお休みさせてください」と伝えました。ゼミ発表の有無は、他の人のスケジュールにも関わってきます。相談必須です。

―教員になるためのおすすめの資格があれば教えてください。

中学教員免許と高校教員免許は両方とっておくべきです。私立校はもちろん、公立校もどちらの免許も持っていた方が絶対良いと思います。それから、司書教諭もおすすめです。持っている、同じ学校の中でふたつ仕事ができる、というアピールになります。図書館の資源を授業に活かせるし、技術の幅も広がると思います。

―後輩の方へアドバイスを。

まず「自分の価値観を大事にしてください」ということです。転職もありだという気持ちでこれから生きていく。挫折経験が少ないのか、京大生は「一発でうまくいかなきゃ」っていう人が多いように感じます。自信を持てるような自分の価値をなるべく自分のペースで高めていくのが一番健康的。それが将来を自分で決め、共鳴した他の人とうまく働くことに繋がっていくように思います。

他人が追い求めている価値が自分と合わないことに、あまり悩まずに欲しがないと思っっています。また、ネガティブな情報ばかりが目に入ってくると自分はこんな環境でやっていけるのかなと更に不安になり、その上、頼りになる情報になかなかたどり着けなくて余計に不安になる。こういった不安を乗り越えるには、実際に人に会うしかないと思います。時間はかかるんですけど、私の場合はやはり、先ほどお話しした教員採用のコミュニティに入れたことが、進路を考える上で大きかったと思います。こうやって話している私にも、もちろん迷いはあります。ちゃんと先生を続けられるかな、とか貯金できるかな、とか。

大なり小なり不安はみんなあるとして、ちょっと勝負に出てみる。行けそうだととなったらずいずい行ってみるのが一番良い時間の進め方なのかな。ちょっとやってみよう、ぐらいの気持ちで、やろう、と思った選択肢をとりあえずやってみる。「何とかなさ」という雰囲気は京大生の強みだと思います!!

―最後に大学生の間に読んでおきたい、おすすめの本を教えてください。

『存在の耐えられない軽さ』

ミラン・クンデラ著；千野栄一訳。-- 集英社、1993。(989.5||S||1)
<https://m.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/TW86218923>

クンデラ著；西永良成訳。-- 河出書房新社、2008。-- (世界文学全集 / 池澤夏樹編；1-03). (908||S||8||1-03)
<https://m.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/BB02591209>

タイトルを見るだけで読みたくなるでしょう?なお、本作のヒロインテレザが携えている『アンナ・カレーニナ』は言わずと知れた圧倒的完成度・読み応えの名作。未読の方はぜひぜひ。また、併せて、自分の専攻分野の先輩が博論を基にして書いた学術書を読んでも研究活動の大きなエネルギーになります。

―ありがとうございました。

【大学院での研究インタビュー】を、吉田南総合図書館のHPに掲載しています。こちらもぜひ、ご覧ください。



【中学・高校の教員免許について】



【京都大学キャリアサポートルーム】

